

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02539

研究課題名（和文）20世紀後半以降における間テクスト的読解方法の展開に立脚した物語理論の構築

研究課題名（英文）Toward a Constructive View of Narrative Theory Based on the Development of Intertextual Approaches to Literary Texts Since the Last Decades of the Twentieth Century

研究代表者

鈴木 聡 (SUZUKI, Akira)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80154516

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、研究代表者の主たる研究対象である虚構テキストを基盤としつつ、物語言説がどのようにして構築されるかに関する理論的知見に達することを目的としたものである。研究の過程においては、人文科学の根源と見なされる精読の方法に立ち返ることの有効性が示されるとともに、今後、研究対象の拡大をどのように図るべきかに関する展望も得られた。ポスト構造主義、脱構築主義以降の理論的成果を視野に入れるとき、浮上してくるのは、文学的テキストと、同時期における科学的、批評的言説は別次元に位置づけられるべきものではないという明白な事実である。そのような見地に立って、批評史全般を網羅する可能性も示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、物語理論への寄与が目差すものであるとともに、研究代表者（鈴木聡）がヴラジーミル・ナボコフの全長篇小説を対象として行ってきた研究に新たな広がりや付加するという意義も有している。ナボコフがコーネル大学並びにハーヴァード大学で行なった講義で取り扱われたヨーロッパ文学の代表的作品を、原典に立ち返りつつ論じ直すことは、それぞれの作品の批評史を再検討する機縁ともなった。物語の生成の場としてのテキストの精読が有する可能性は極めて多様であるというべきであろう。20世紀の歴史を背景として持つナボコフの短篇小説を論じた論攷においては、歴史そのものが有する物語性にも眼が向けられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to reach a theoretical understanding about constructing narrative discourses based upon fictional texts, heretofore main area of concern for the principal investigator. During the research process, the relevance of returning to methodology of close reading, which may be regarded as a fountainhead of humanities, was demonstrated, and, on the other hand, a prospect concerning how to expand the scope of research in the future was obtained. When we take into account the theoretical achievements after post-structuralism and deconstructionism, what emerges is the obvious fact that literary texts and scientific and critical discourses of the same period should not be placed in different dimensions. The possibility of covering the entire history of criticism from such a perspective was also suggested.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：物語理論 批評理論 想像力 多様性 間テクスト性

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者が平成23年度～平成26年度科学研究費助成事業(基盤研究(C))課題番号23520285)として行なった研究「想像力の作用を基盤に据えた20世紀以降のジャンル論的批評と物語理論の展開」の成果を通して、19世紀ヨーロッパ文学の伝統(例えばギュスターヴ・フローベールによって確立された長篇小説の構成方法)が、20世紀における方法的革新の基礎をなすものであること、同時代において人類全体が共通して直面せざるを得なかった難局(個人の自由を死守することの困難さ、個々のイデオロギーや価値観のあいだに横たわる克服しがたい対立など)こそが、なにごとかを物語ろうとする文学者たちの衝動の起源をなし、文学的想像力によって織りなされた虚構テキストの根柢をなすものであることが示された。

その点を踏まえていえば、テキストを読む行為は、文化の構造そのものが全般的に呈示する認識論上の諸問題にたいする個々人の姿勢と密接な繋がりを持たざるを得なくなってくる。テキストとその読みかたの関係は、われわれと他者との関わり、われわれ自身の現時点における世界観のありかたを映し出すものとなるのである。テキストによって徴候的に示される作者の自意識と、虚構のうちに設定された語り手の自意識という二層化された言説のありかたは、ジェラール・ジュネットなどに代表されるナラトロジーの理論の主たる課題となってきたが、人間にとって物語するという行為が有する別様の問題にも着目しなければならない。ひとはなぜすでに生起した事柄について、しばしばすでに存在する言説を反覆するようにして物語ろうとするのか。テキストと他のテキスト、後続する言説と先行する言説の関係とは如何なるものなのか。この問題が極めて錯綜したものであることは疑いないが、それに敢えて取り組むことによって、所謂文学的テキスト以外のものをも含む、より広汎な対象に応用可能な物語理論に到達することが可能となるであろう。以上で示したような展望にもとづき、今回、新たな研究計画を抱懐するに到ったものである

## 2. 研究の目的

他者とのコミュニケーションを成立させるとともに、「私」という主体をかたちづくるうえで不可欠の要素として捉えるならば、物語行為は、社会言語学、認知言語学など他の学問分野とも共通した研究テーマである。隣接する諸科学から積極的に学ぶべき必要性はますます増大しているといわなければならないが、別の見かたをすることもできる。それらの学問分野では取りあげられることのない文学史的な観念や現象にも、物語理論の観点やその他の観点から新たな意義を見だし、より綿密な考察を行なうことができるようにすることは、近い将来の人文科学全般における文学研究の位置づけを構想してみると、重要な手順となってくるものと思われるのだ。近年における文学史の理論的展開によってなされた、これまで一律に古典ないしは正典と見なされてきた文学的テキスト群の刷新、確固たるものとして受け容れられることもある長篇小説のようなジャンルの特性に関する徹底した吟味などは大きな成果であるが、特に現代における学問的主題の多くが具体的に形を取るようになった20世紀後半、いくつかの動きがほぼ時期を同じくして生じたことの意味も改めて考えてみるに価するだろう。ジャック・デリダがその主要著作(*De la grammatologie* [1967], *L'écriture et la différence* [1967], *La Dissémination* [1972] など)により脱構築、差延、散種といった彼の主要概念を提起していたのとちょうど同じ頃、ヴラジーミル・ナボコフのような作家が、きわめて自意識的、自己言及的な作品(とりわけ最晩年の長篇小説 *Look at the Harlequins!* [1974] や未完成の遺作である *The Original of*

Laura [1977]) を著して、起源なき模倣の連鎖、模倣よりも遅延して到来する原型などのモチーフを繰り返し作品中に登場させたことは単なる偶然と断定するべきではあるまい。20世紀後半における主要な文学的テキストに関して、歴史的、文化的文脈に則してその意味内容を綿密に劃定する作業はなによりも肝要であるが、例えば、すでに言及した事例などについて、モダニズムからポストモダニズムへと到る転回の現われとして漫然と説明付けるだけで問題を解決することはできない。納得し得る結論に達するためには、個々のテキストの特質ばかりでなく、そのテキストが他のテキストとのあいだにかたちづくっている諸関係も解き明かさなければならぬ。

デリダがその著書『散種』のなかでプラトン、ステファヌ・マラルメ、フィリップ・ソレルスを素材として実践したような間テキスト的読解を、伝統的な精読の方法と併用して、虚構作品以外のもの、同時代の学術書にまで当て嵌めてみることもできるはずである。そのような観点に立って、本研究においては、ジュネット (Gérard Genette, *Figures I-III* [1967-1970])、フ란ツ・シュタンツェル (Franz Karl Stanzel, *Theorie des Erzählens* [1979])、ミーケ・バル (Mieke Bal, *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative* [1985, 2009]) などのような、語り手の機能に関する代表的な理論書のみならず、物語論的批評と対立する立場と見なされる主題論的批評 (ロラン・バルト、ジャン＝ピエール・リシャルなど) から、テキストの文法読解には常に決定不可能性という残滓に付き纏われることになるとするポール・ド・マンの議論 (Paul de Man, *The Resistance to Theory* [1986]) に到るまでを視野に入れる。こうしたパースペクティブに従うならば、例えばナボコフがコーネル大学で行なったヨーロッパ文学に関する講義 (Vladimir Nabokov, *Lectures on Literature*, ed. Fredson Bowers [1980] として纏められている) における主題論的な考察の欠落を、ただ欠落しているという事実としてではなく、なんらかのイデオロギーあるいは価値観を表象するものとして論じる途も開けてくるのではないかと思われる。

本研究において具体例として取りあげられるのは概ね文学的テキストであるが、個別のテキストを精緻に読み解くことを通して目差されるのは、比較研究の可能性とともに、映画その他の表現形式にも応用し得る理論の実践である。そのことによって、文学研究の枠組みを超えた、人文科学の諸分野を統合し得る方向性を探ることもできるであろう。物語行為は、時によってはすでに過ぎ去った事象を再現し、時によっては本来的にあり得ない事象を仮設的に組み立てるといった側面を必然的に伴っている。その意味において物語理論は、人間の想像力の役割、とりわけ世界認識の方法としてのその役割に関して、また、その時間意識並びに記憶との関わりに関して、なんらかの洞察を与えるものとなることが期待されるであろう。

### 3. 研究の方法

研究代表者 (鈴木聡) が単独で遂行する計画であるため、研究代表者のもとに極力網羅的に基礎資料を集める努力を土台とする。学問的重要度の高い文献、最新の文献を優先し、体系的に蒐集することを旨とし、研究の進捗状況につれて、さらに多方面にわたる資料を蓄積することを目差すとともに、それらの資料の詳細な読解、分析の成果となる論文の執筆を続ける。

### 4. 研究成果

期間中に 8 篇の論攷を執筆し発表した。

(1) 脚と殻　　ヴラジーミル・ナボコフの『変身』論 (『東京外国語大学論集』 9 4 号 [2017年])

グラジミル・ナボコフの『文学講義』(フレッドソン・パワーズ編、1980年)で取り扱われた諸作品のうち、ドイツ語を原典とするものはフランツ・カフカの中篇小説『変身』(1912年、1915年)のみである。本論文においては、ナボコフ独自の着眼点を踏まえつつ、『変身』を論じる際に肝要なものとなってくる問題の所在をジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの共著『カフカ　マイナー文学のために』(1975年)をも参照しつつ明らかにすることを目差した。

(2) 関係と妄想　　グラジミル・ナボコフの「記号と象徴」(『東京外国語大学論集』95号[2017年])

グラジミル・ナボコフの短篇小説「記号と象徴」(1948年)は、彼が構想した「表面の半透明な物語の内部に、あるいはその背後に第二の(主要な)物語を織りこむ」方式で書かれた虚構作品のひとつである。本作品においては、療養所に収容されている息子の病状と、彼に誕生日の贈り物を届けようとする夫妻の一日の行動が詳細に語られているものの、息子の言動が伝聞によってしか判明しないように、随所に空白があるために、確定的な結論を導き出すことが困難になっている。解釈の鍵となってくるのは、息子の病とされる「関係狂」(referential mania)である。

(3) 運命と意識　　グラジミル・ナボコフの『ユリシーズ』論(『東京外国語大学論集』96号[2018年])

グラジミル・ナボコフの『文学講義』(フレッドソン・パワーズ編、1980年)で取り扱われた諸作品のうち、二十世紀を代表するものとして選ばれたのは、マルセル・プルーストの長篇小説『スワン家のほうへ』(『失われた時を求めて』第一篇、1913年)、フランツ・カフカの中篇小説『変身』(1912年執筆、1915年発表)、並びにジェイムズ・ジョイスの長篇小説『ユリシーズ』(1922年)である。普遍と特殊を絶妙な均衡のうちに併存させた稀有なテクストである『ユリシーズ』に関して、ナボコフは、その細部の緻密な組み立てとともに、ブルームという比類ない中心的登場人物の造型に主眼を置いて論じるいっぽう、それがホメロスの原典とのあいだに有している主題論的類縁関係に関しては極力無視しようとする。

(4) 布置と調和　　グラジミル・ナボコフの「雲、城、湖」(『東京外国語大学論集』97号[2018年])

グラジミル・ナボコフの短篇小説「雲、城、湖」(1937年、1941年)は、彼がマリーエンバート滞在中にロシア語で執筆し、アメリカ合衆国に移住したのちに、英語に訳され、『アトランティック・マンスリー』誌に発表された作品である。作品中で極めて印象深く描写されている風景が「中央ヨーロッパ」で多く見られるものだとされていることから読み取ることができるように、物語のなかで生じている出来事は作者自身の経験と関連しているものと考えられるが、主人公が半ば強制的に参加させられる旅行が、同時代のドイツにおける歓喜力行団のプログラムを念頭に置いたものである点から考えてみても、作者が、全篇を飽くまでも反事実的な虚構として組み立てようとしていることは明らかである。

(5) 記憶と直観　　グラジミル・ナボコフの『ドン・キホーテ』論(『東京外国語大学論集』98号[2019年])

グラジミル・ナボコフはスペイン語を習得していなかったが、ハーヴァード大学でミゲル・

デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』(1609年、1615年)について講義する機会に(英語訳に依拠しつつ)この作品を詳細に研究した。細部を疎かにせず、テキストに実際に書かれていることがらにひたすら徹底的に拘ろうとする点で、ナボコフは飽くまでも完全主義的である。取り扱う対象が分け隔てされることはない。『ドン・キホーテ』について論じるにあたって、彼は、ただ単に自分がよく知らない作品に挑戦しようとしただけではなかった。『ドン・キホーテ』に関して研究者たちや批評家たちがこれまで論じてきた内容のうちに、多くの固定観念や先入観が含まれていたと指摘することにより、ナボコフは、作品の真の姿を明らかにしようとするのである。

(6) 探求と孤独　　ヴラジーミル・ナボコフの「ランス」(『東京外国語大学論集』99号[2019年])

短篇小说「ランス」のなかでヴラジーミル・ナボコフが試みたのは、過去、現在、未来という異なる次元に属す言説を共存させつつ、普遍的な主題を追求することであった。主眼が置かれるのは、人間の肉体的、精神的活動の(理論的にいえば無限の)可能性と関わるものである。一見したところ、この作品は、サイエンス・フィクションとして読むことのできる側面を有しているようだ。しかし、もともとサイエンス・フィクションというジャンルにたいして批判的な作者は、それとは極めて懸け離れた観点を導入しようとしている。この作品においてナボコフは、ケンブリッジ大学在学中に研究対象としたことのあるクレティアン・ド・トロワやサー・トマス・マロリーに代表されるような中世の騎士道ロマンス、現代における登山、未来における惑星間探査という三つの題材を取りあげたのであった。

(7) 明治期歌舞伎脚本における英文学作品の受容　　エドワード・ブルワー＝リットンと河竹黙阿彌(『東京外国語大学論集』100号[2020年])

日本で英文学作品が翻訳あるいは翻案を経て、一般読者に広く受け容れられるようになった歴史的過程を研究テーマとするとき、今後必要となってくるのは、個別の作品を取りあげ、より詳細に検討することである。出発点とされてよいのは、エドワード・ブルワー＝リットンの作品であろう。明治期に日本で最初に翻訳された英文学作品は、ブルワー＝リットンの長篇小説であったが、舞台化された最初の翻案もブルワー＝リットンの戯曲『金』(1840年)だったのである。

(8) 残酷と非関与　　ヴラジーミル・ナボコフの短篇小说の場合(『東京外国語大学論集』101号[2020年])

ヴラジーミル・ナボコフは、時代背景や社会状況を超越して、作品の普遍的価値をなによりも優先させる作家であるように思われるが、多くの作品において、同時代の政治情勢を明確に意識していることもまた確かである。各作品における語り手の姿勢は、自分自身の人生であろうと、他者の人生であろうと、生そのものを極めて冷静に捉えようとしている点に特徴がある。人びとが権力機構に蹂躪され、犠牲にされるという不合理に対して、憤りを前面に打ち出すことはなく、その代わりに、気遣いを潜めつつ、外在する世界との和解を暗に拒絶し、距離を置こうとする点で一貫性があるといえるだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡   | 4. 巻<br>100           |
| 2. 論文標題<br>明治期歌舞伎脚本における英文学作品の受容 エドワード・ブルワー=リットンと河竹黙阿彌 | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                                   | 6. 最初と最後の頁<br>205-227 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/94992             | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                 | 国際共著<br>-             |

|   |                      |
|---|----------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                             | 4. 巻<br>101          |
| 2. 論文標題<br>残酷と非関与 グラジミール・ナボコフの短篇小説の場合     | 5. 発行年<br>2020年      |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                       | 6. 最初と最後の頁<br>95-115 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/95718 | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）     | 国際共著<br>-            |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                             | 4. 巻<br>98            |
| 2. 論文標題<br>記憶と直観 グラジミール・ナボコフの『ドン・キホーテ』論   | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                       | 6. 最初と最後の頁<br>126-148 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/93956 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）     | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                             | 4. 巻<br>99            |
| 2. 論文標題<br>探求と孤独 グラジミール・ナボコフの「ランス」        | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                       | 6. 最初と最後の頁<br>151-172 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/94298 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）     | 国際共著<br>-             |

|  |                        |
|--|------------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                              | 4. 巻<br>96             |
| 2. 論文標題<br>運命と意識    ヴラジーミル・ナボコフの『ユリシーズ』論   | 5. 発行年<br>2018年        |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                        | 6. 最初と最後の頁<br>243 -266 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15026/92410 | 査読の有無<br>無             |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)     | 国際共著<br>-              |

|  |                        |
|--|------------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                              | 4. 巻<br>97             |
| 2. 論文標題<br>布置と調和    ヴラジーミル・ナボコフの「雲、城、湖」    | 5. 発行年<br>2018年        |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                        | 6. 最初と最後の頁<br>285 -304 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15026/92842 | 査読の有無<br>無             |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)     | 国際共著<br>-              |

|  |                        |
|--|------------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                              | 4. 巻<br>94             |
| 2. 論文標題<br>脚と殻    ヴラジーミル・ナボコフの『変身』論        | 5. 発行年<br>2017年        |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                        | 6. 最初と最後の頁<br>103 -128 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15026/89310 | 査読の有無<br>無             |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難     | 国際共著<br>-              |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木聡                              | 4. 巻<br>95            |
| 2. 論文標題<br>関係と妄想    ヴラジーミル・ナボコフの「記号と象徴」    | 5. 発行年<br>2017年       |
| 3. 雑誌名<br>東京外国語大学論集                        | 6. 最初と最後の頁<br>209-230 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.15026/89931 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難     | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|